

東洋大学長 殿
 To the President of Toyo University

ウクライナからの研究員 研究報告書
 Research Report by Researcher from Ukraine

氏名 Name	コミサロフ・コスチャンティン Kostiantyn Komisarov
所属大学名・職名 (身分) Affiliation and position name	ボリス・グリーンチェエンコ記念キーウ首都大学 東洋言語学部 日本語・翻訳学科 学科長
研究課題名 Research topic	自然言語で表現される話者の国民性と価値観 (日本語とウクライナ語をもとに)
研究期間 Research period	2026年 1月 11日 ~ 2026年 1月 26日 (16日間) From 2026/01/11 to 2026/01/26 (16 days)
研究協力教員氏名 (所属) Research partner (affiliation)	平畑 奈美 教授 (文学部)
研究成果発表 (予定も含む) Publication/Presentation (including future ones)	<ul style="list-style-type: none"> 「私たちは何を『日本的』と呼んでいるのか：国民性概念の輪郭を探る」(日本語学科のセミナーにて発表済み) 『日本人らしさ』の正体 —あいまいな定義がもたらす教育現場の盲点— (発表予定) 「日本語における『丁寧さの原理』の再構築 —学生の共感を呼ぶ教育実践への試み— (発表予定) 「価値観の翻訳可能性を問う —日本語の対人配慮とウクライナ語の自己表出— (発表予定) 「語彙から紐解く世界観の相違 —日本語とウクライナ語における『価値』の所在— (発表予定)
研究成果の概要 Summary of your research achievements	<p>本研究は、東洋大学を拠点に、指導教官との対話による理論的深化と、国内への実地出張を含む調査・研究活動を通じて構築されたものである。日本語教育における「国民性」や「丁寧さ」の概念を再定義し、日本語とウクライナ語の対照研究を通じて、言語に宿る価値観の解明を目的としている。</p> <p>本研究群は、言語を文化や精神構造の窓として捉え、多文化共生社会におけるコミュニケーション教育の指針となることを目指している。一連の発表予定論文は、これまでの理論研究と出張による知見を統合した集大成である。</p>

研究成果報告書

——自然言語で表現される話者の国民性と価値観（日本語とウクライナ語をもとに）——

1. 研究の背景と目的

本研究は、日本語教育の現場において自明視されがちな「日本的」「国民性」という概念に対し、言語学および文化人類学的な視点からクリティカルな検討を加えることを目的とした。特に、ウクライナ語との対照研究を通じて、言語表現の背後に潜む価値観の相違を浮き彫りにし、多文化共生社会における真の相互理解のための教育モデルを構築することを目指している。

2. 理論的研究の成果（中間報告）

これまでの研究を通じ、以下の5つの主要な論点を提示した。

「国民性」概念の脱構築：日本語学科セミナー等において、ステレオタイプな日本人像がいかに教育現場の「盲点」となっているかを指摘した。

「丁寧さの原理（Politeness Principle）」の現代的翻案：敬語体系の習得を超え、学生が納得感を持って運用できる「配慮のメカニズム」を理論化した。

日本語とウクライナ語の対照分析：日本語の「和（Harmony）」とウクライナ語の「Воля（Freedom/Will）」を対置させ、語彙や慣用句から両文化の精神構造の差異を明らかにした。

3. 実地調査（京都研修）による知見の深化

理論的研究を補完し、日本文化の多層的な構造を実証的に把握するため、京都における歴史的建造物および文化施設の視察調査を実施した。

3.1 文字文化と都市形成の相関

漢字ミュージアム（祇園）：「漢字タワー（5万字）」等の視察を通じ、文字を単なる記号ではなく、歴史の積層を伴う「文化の器」として再確認した。これは「語彙から紐解く世界観」という本研究の核心を裏付ける貴重な視点となった。

八坂神社と祇園：信仰を基盤とした門前町の発展を確認し、都市形成と精神性が不可分であることを実感した。

3.2 建築と庭園に見る精神性：対比の美学

技術と様式（清水寺・東福寺）：清水寺の「懸造り」に見る力学的知恵と、東福寺方丈庭園における伝統とモダンの融合を視察。日本の美意識が常に「継承と革新」の連続体であるこ

とを学んだ。

光と影、動と静（金閣・銀閣）：世界的ブランド力を持つ金閣寺の「動」の魅力に対し、銀閣寺の光と影の設計に見る「静」の美学を対照的に分析。日本文化の両義性を確認した。

禅の思想と持続可能性（龍安寺）：石庭の余白、および「吾唯足知（われただたるをしる）」の思想に触れた。この精神的充足を尊ぶ態度は、現代のSDGs（持続可能な社会）にも通じる極めて現代的な示唆を含んでいる。

3.3 信仰の根深さと現代ソフトパワーの展開

伏見稲荷大社：千本鳥居の視察を通じ、商売繁盛や五穀豊穡を願う民俗的な信仰が、いかに現代社会の深層に根ざしているかを再認識した。

京都国際マンガミュージアム：伝統文化の対極にある「マンガ」の保存・活用を視察。現代日本のソフトパワーが、古典的な価値観とどのように接続されているかを理解する機会となった。

4. 総括と今後の展望

今回の京都視察により、文字、建築、庭園、そして現代のポップカルチャーに至るまで、日本文化が単一の「国民性」で説明できるものではなく、重層的な歴史の積み重ね（レイヤー）によって構成されていることを体系的に理解できた。

【今後の研究への反映】

教材開発への反映：京都で得た「視覚的な文化的事実」を、抽象的な「丁寧さの原理」や「価値観」の解説に具体例として導入する。

対照言語学の深化：ウクライナの伝統文化と、今回視察した日本の伝統文化の「保存と変容」のプロセスを比較し、論文の質を向上させる。

本研究および研修の成果は、予定されている論文『日本人らしさ』の正体』および「日本語とウクライナ語における価値の所在」において、より強固なエビデンスとして結実させる所存である。